

# 道標

高校時代まで今治で生活し、大学進学で東北・仙台に住み、一時期、盛岡で生活したあと、仙台に戻ってきた。今では今治での生活時間より、東北の方がずいぶん長くなり、どちらの生活もよいものだと思えるようになった。仙台で生活を始めた自分には、言葉、冬の寒さ、夏の涼しさ、習慣など、今治での生活とずいぶん違っていた。その中でも違いといつものを通り越したものとして、今治ではほとんど感じる事がなかった「有感地震」の多さがあった。地球はこんなに揺れるものなのだと、ずいぶん驚いた。小中高校と地震の訓練と称して避難をしたり、机の下に潜っていたことを思い出すが、それはあくまでも訓練でしかなかったような気がする。怖いもの、危ないもの

## 実体験の大切さ

# 今の子供に教えよう



東北大学大学院  
生命科学研究所教授

渡辺 正夫

代名詞である、雷、火事、台風のすごさは今治にいた子供時代に、十分すぎるくらい体験済みであった。それがたぶん、この10年くらいであるのか、日本だけでなく海外でも大き

な地震に襲われ、大きな被害が出るようになるのを目にしてきた。出張中に仙台で大きな地震があつてびっくりして、研究室に電話をすることもあつた。また、出張先で今治時代の友人から「芸予地震」の連絡をもらい、あんなとこ

ろで大きな地震が起きることがあるのだと驚嘆した。これだけの警告を受けながら、仙台で巨大地震が起きるわけがないと高をくくっていた。これは、これまでに経験してきた「有感地震」が多いこと、また、巨大地震が来るといふ警鐘を甘く見ていたのだろう。その結果、昨年3月11日の「東北地方太平洋沖地震」（東日本大震災）では、ぼつぜん立ち尽くし、3分間、揺れが収まるのをひたすら待ち続けていた。周りで、机の下に隠れる人がいるのを見ながら。

それを実生活に生かすことができなかつた。それが今回の反省であろう。ここで取り上げたような「巨大地震」といわないまでも、人は子供時代から、さまざまな実体験をつむぐことで、成長する。自分を例にとつて恐縮であるが、

## ふるさと伝言

小学校時代、帰りの2キロの道のりで道草をしながら、稲の成長を観察したり、麦笛、豆笛を作ることの難しさなど、たくさんのことを体験した。夏には、セミやカブトムシを捕る毎日であった。この毎日の生活での経験をを通して、生命の不思議さ、大切さ、理屈がわからなくても体験から物事をやる事ができるといふことを理解したように思う。

では、現代の子供たちはどうだろうか。バーチャルのゲームの中で遊び、生き物を飼うことさえも、バーチャルの世界がある。実際の自然環境の中で体験がきわめて不足しているといわざるを得ない。本当にこんな子供時代でよいのだろうか。昭和のよき時代を子供時代に過したものととして、子供時代にたくさん経験をすること、そして、それを実生活に生かすことの大切さを教える教育というのが今、求められているのではないだろうか。というより、そうした教育がなければ、日本という国が先細りになるような気がしてならない。

(わたなべ・まさお、今治市生まれ)